

研究会報告

第63回

東京医科大学免疫・アレルギー研究会

日時：平成12年5月16日(火)

午後5:00~7:30

会場：東京医科大学病院 本館6階 臨床講堂

世話人：東京薬科大学 薬学部臨床薬理学教室

岡 希太郎

特別講演：グルココルチコイド療法最近の進歩

東邦大学 医学部内科学教室第1講座

教授 宮地幸隆 先生

1. 吸入ステロイド剤Beclomethasone dipropionate (BDP)からFluticasone propionate (FP)への変更による副腎皮質機能の変動

(東京薬大・臨床薬理) 奥石 徹、本間真人、岡 希太郎
(東京医大・内科学第三) 沖田美佐、馬島英輔、桜井かほり、
小口安美、丸岡敦隆、森田園子、
玉木利和、露口都子、松村康広、
新妻知行、林 徹

BDP から FP に変更した気管支喘息患者12名に対し、薬剤変更前後で、低用量 ACTH 負荷試験を行い、cortisol 応答性を比較した。また %PEFR とその日内変動、喘息点数により抗喘息効果を比較した。負荷試験は、薬剤使用後12週間以上経過した時点で行った。FP への変更後、1日吸入量は約43%減量された($p < 0.0001$)。朝夕の %PEFR は、ともに有意に上昇し($p < 0.05$)、日内変動も有意に減少した($p < 0.05$)。喘息点数には明らかな違いはなかった。薬剤変更後、ACTH 負荷後の cortisol 値と cortisol の Peak 値に違いはなかったが、上昇分は有意に増加した($p < 0.005$)。また BDP 使用時に Peak 値と上昇分の正常応答の基準を満たさなかった3名は、薬剤変更後に基準を満たし応答性が改善した。以上のことから、BDP から FP への変更では、BDP 使用時の半量の1日吸入量で FP を使用しても、抗喘息効果を低下させず、副腎皮質機能への影響を減少させることができると考えられた。

2. サルコイドーシスにおける血清およびBALF中の可溶性CD44の検討

(内科学第一) 田胡 秀和、春日 郁馬、長手 聡、
國澤 晃、峯村 和成、内海 健太、大屋敷一馬
【目的】CD44は接着分子の一つであり、血清中に検出可能な可溶性CD44(以下sCD44)が白血病や骨髄異形成症候群の病型進展と密接に関与することを報告した。今回免疫学的異常が背景と考えられるサルコイドーシス(以下サ症)の血清とBALFのsCD44を測定し、臨床的意義を検討した。

【対象と方法】組織診にてサ症と確定診断された32例に対して、BALFより回収して得られた上清および血清sCD44をELISA法にて測定し、健常者対象群と比較した。

【結果】サ症の血清sCD44は $341 \pm 163 \text{ ng/ml}$ と対象群の $145 \pm 22.8 \text{ ng/ml}$ と比較して有意に高値を示した($p < 0.0001$)。一方BALFのsCD44はサ症 $16.8 \pm 10.8 \text{ ng/ml}$ 、対象群 $16.7 \pm 6.7 \text{ ng/ml}$ と有意差は認めなかった。

【結論】サ症患者の血清sCD44測定は臨床的に有用であり、免疫異常を反映していると思われた。

3 アトピー性皮膚炎のアレルギー性炎症におけるBcl-2ファミリーによる調節機構の検討

(皮膚科) 加藤 雪彦、磯部 環貴、渋谷 博文、
大島 治子、千葉 友紀、玉城 毅、
山城 将臣、坂崎 由朗、古賀 道之

目的：我々はBcl-2ファミリー蛋白がアトピー性皮膚炎(AD)のアレルギー性炎症の調節に関与しているかどうか検討した。

方法：AD患者5人、健常人5人の末梢血単核球を、*Dermatophagoides farinae* (Df) 抗原と7日間培養し得られた細胞を、表面マーカーCD4、細胞内サイトカインIL-5、アポトーシス関連蛋白Bcl-2あるいはBaxの3重染色した後、flow cytometerで解析した。

結果：PBMCのCD4+cellにおけるIL-5+Bcl-2+cellの割合はDf刺激AD群において無刺激AD群やDf刺激あるいは無刺激健常人に比べ有意に高かった。また、Df刺激によるIL-5+Bax+cellの割合は健常人よりAD群のほうが高かった。しかし、Df刺激AD群においてIL-5産生CD4+cellのうち、Bcl-2+cellの割合はBax+cellより高かった。

結論：アレルギー性炎症の調節にBcl-2ファミリー蛋白が関与していることが示唆された。